

資料

平成 25 年度性器クラミジア・淋菌感染症抗原検査結果概要

岡元冬樹・前田詠里子・大石 明・江藤良樹・村上光一・世良暢之

平成 25 年度に当所に検査依頼された性器クラミジア・淋菌感染症抗原検査検体の総数は 837 件（男性 485 名、女性 346 名、性別不明 6 名）であった。そのうち、クラミジア抗原陽性者は 47 名（男性 16 名、女性 31 名）で、陽性率は 5.6 % であった。一方、淋菌抗原陽性者は 6 名（男性 2 名、女性 4 名）で、陽性率は 0.7 % であった。

[キーワード：性器クラミジア、淋菌、抗原検査]

1 はじめに

性器クラミジア感染症は日本で最も多い性感染症であり、淋菌感染症がこれに次ぐ¹⁾。これらは、“感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律”、いわゆる感染症法では、5 類感染症として性感染症定点からの報告が義務づけられている。性器クラミジア、淋菌感染症の患者数が多い原因のひとつとして無症候性の感染者が存在しており、本人が感染していることに気づかないまま性交渉で相手に感染させるという無症候性感染の連鎖が感染を拡大していると考えられている²⁾。

福岡県では性感染症予防対策の一環として、平成 16 年 3 月より性器クラミジア感染症について、抗体検査を無料で実施してきた。厚生労働省の指針の一部改正により、平成 25 年 4 月より尿を検体とした抗原検査に変更し、淋菌感染症についても同様の抗原検査が可能となった。県内の保健福祉（環境）事務所にて、性器クラミジア、淋菌感染症検査用に採尿を行っている。当所では、これらの保健福祉（環境）事務所から週に一度搬入される検体について抗原検査を実施している。本稿では、平成 25 年度の検査結果の概要について報告する。

2 方法

2・1 検体

平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月にかけて、週に一度、県内 9 保健福祉（環境）事務所にて採取された尿 837 件（男性 485 名、女性 346 名、性別不明 6 名）を用いた。カップに採取した初尿（20-30 mL）から 2 mL を尿搬送チューブに入れてチューブ内の尿搬送液と混和させたものを検体とした。当所には尿搬送チューブが搬入され、それを用いて検査を行った。

2・2 検査項目

初尿中のクラミジア抗原及び淋菌抗原について検査を実施した。

2・3 試薬及び機器

クラミジア及び淋菌抗原検査には、ホロジックジャパン（株）製のキット、アプティマ Combo2 クラミジア/ゴノレアを、機器は As-1000 増幅検出機/Ps-1000 分離機（富士レビオ（株））をそれぞれ用いた。

2・4 検査方法

テンチューブユニット (TTU) に RNA 抽出液を 100 μ L 入れ、陽性コントロール（クラミジア、淋菌）あるいは尿検体 400 μ L を加える。手で緩やかに攪拌し、Ps-1000 分離機にセットした。約 2 時間で、ターゲットキャプチャー法、によりクラミジア及び淋菌の rRNA にそれぞれ特異的なプローブを用いることにより RNA を精製した。Ps-1000 での操作が完了したら、TTU を As-1000 増幅検出機にセットした。約 3 時間で Transcription mediated amplification (TMA) 法により RNA 増幅後、発光特性の異なるプローブを用いたハイブリダイゼーションによりクラミジア、淋菌の検出を行った。結果は、陽性、陰性で示した。

3 結果

平成 25 年度の性器クラミジア、淋菌抗原検査結果、年齢区分別検体搬入数、抗原陽性数（陽性率）を表 1 に示す。837 検体（名）のうち、クラミジア抗原陽性は 47 名（男性 16 名、女性 31 名）、淋菌抗原陽性は 6 名（男性 2 名、女性 4 名）であった。クラミジア抗原陽性率は全体で 5.6 %（男性 3.3 %、女性 9.0 %）、淋菌抗原陽性率は全体で 0.7 %（男性 0.4 %、女性 1.2 %）でいずれも女性のほうが高い傾向が見られた。検体搬入数は男性では 20

歳代で 181 名と最も多く、30 歳代では 143 名であった。女性では 20 歳代で 146 名と最も多く 30 歳代では 100 名であった。抗原陽性数を比較すると男女ともに 20 歳代で他の年代と比較して高い傾向が観察された。前年度まで行われていたクラミジア抗体検査では、陽性率が 32.8 % であり³⁾、単純に比較はできないが、大幅に陽性率は低下した。

表1 年齢区分別検体搬入数および抗原陽性数（陽性率）*

性別	年齢区分	検体数	クラミジア陽性数	淋菌陽性数
男性	～19歳	3	0	0
	20～29歳	181	9	1
	30～39歳	143	4	1
	40～49歳	86	2	0
	50～59歳	31	0	0
	60歳～	35	0	0
	不明	6	1	0
小計		485	16	2
女性	～19歳	37	9	1
	20～29歳	146	15	3
	30～39歳	100	4	0
	40～49歳	42	2	0
	50～59歳	10	1	0
	60歳～	9	0	0
	不明	2	0	0
小計		346	31	4
不明		6	0	0
計		837	47 (5.6%)	6 (0.7%)

*年齢等は自己申告による

4 考察

厚生労働省の性感染症報告数による全国の性器クラミジア感染症、淋菌感染症の定点当たりの報告数は、平成 14 年のそれぞれ 47.73、23.91 をピークに平成 24 年はそれぞれ 25.26、9.52 と減少傾向にある⁴⁾。一方、福岡県結核・感染症発生動向調査事業による性器クラミジア感染症、淋菌感染症の定点当たりの報告数は、平成 11 年のそれぞれ 98.3、80.1 をピークに、平成 24 年はそれぞれ 39.1、14.9 と減少傾向にあるものの全国平均よりも多かった⁵⁾。以上のように福岡県はこれらの感染症の定点当たりの患者報告数が全国と比較して多く、今後とも啓発活動の継続が必要と考えられた。

文献

- 1) 小野寺昭一：医学のあゆみ，231，53-58，2009.
- 2) 余田敬子ら：口咽科，24，171-177，2011.
- 3) 濱崎光宏ら：福岡県保健環境研究所年報，40，128-129，2013.
- 4) 厚生労働省：性感染症報告数，<http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html>.
- 5) 福岡県結核・感染症発生動向調査事業資料集平成24年，平成25年3月.